

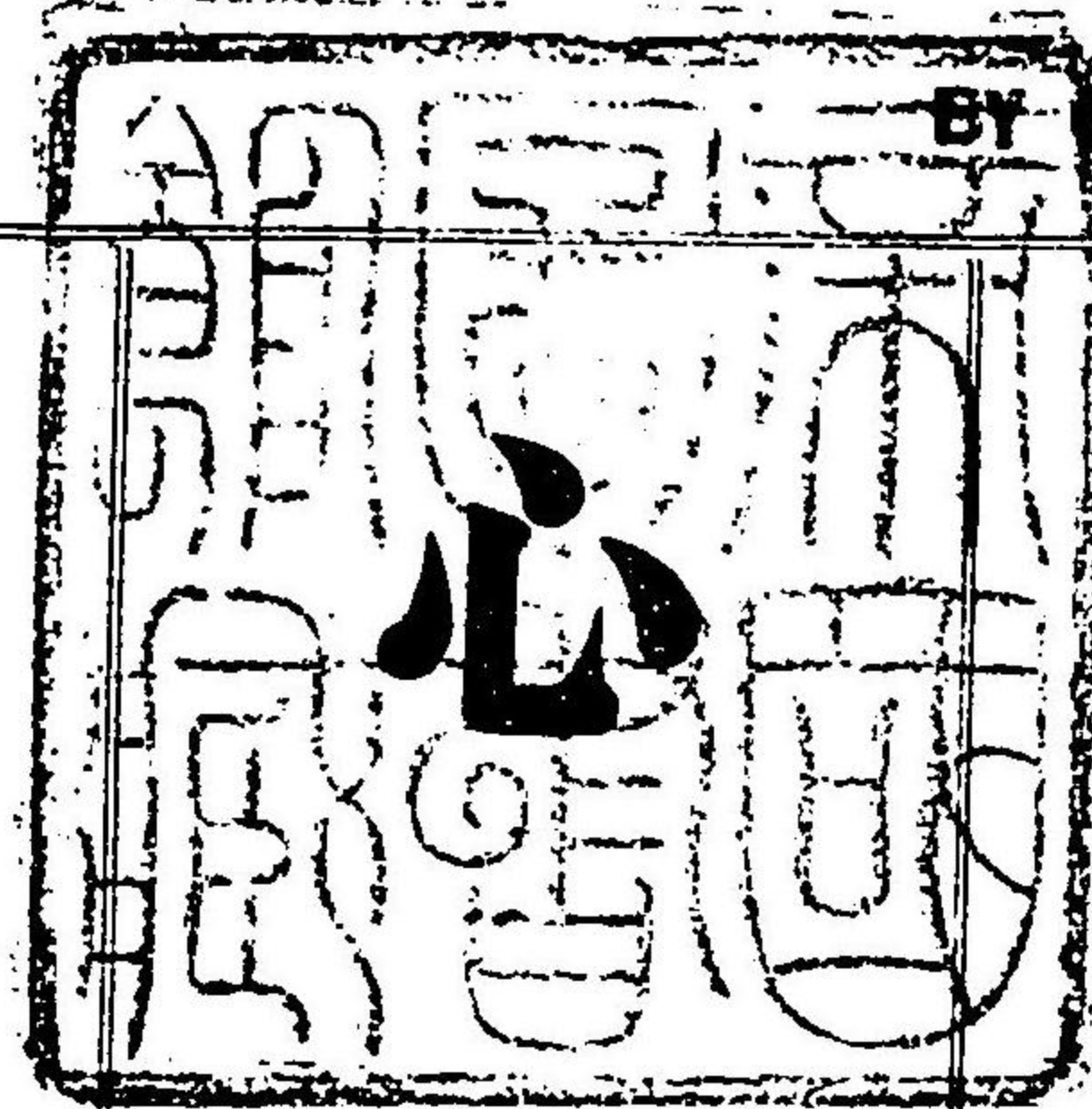
心如鏡

258  
27

特49  
13

A PICTURE OF HEART.

BY C. KUGA.



震  
峯  
子  
著

大阪

大日本基督教幻燈傳道會出版

心

鏡

明治

40 6 14

丙午

はしがき

馬り多き放蕩の世に罪を蒙りて生れいで、嗚しき榮耀に憧がれ不義の快樂を慕ひ胸中何等の慰藉あるなく、常に煩悶と苦痛とに悩みつゝ、おはれ、絶望の境に沈淪しむたりし、罪人のかしらなるわれ、何爲れ三人をさばき、將た之を導くの資格あらんや、

遮莫、唯だ、キリストイエスの殿に頼りて、神の恵をうけ、力なくて義とせられ且つ主の寶血を以て聖潔められ、裏に聖靈を宿し奉り、其の言ひ難くして榮光ある歡喜に満ざるゝの恩寵を辱ふしたる者、衷情懇する能はざるものあり、時に神は、大日本基督教幻燈傳道會主幹青木山大郎氏をして、幻燈傳道用の小冊子出版の事を志さしめ、彼を通して、余に其編纂の任に當る可きを命じ給へり、於是乎、余の思想淺薄、加ふるに文字に乏しきを顧みず、聊か實驗に則り、導かる、まきに本書を著す事とはなりぬ、若夫れ光明なくして暗昧に彷徨へる人達の信仰の樂どもなり得ば如何にさいはひなるべき、

願はくば、此の愚なる、弱き、賤しき、無きが如き者を選びて、其の憐憫と眞理との故により力をわたへて之を成さしめ給ひし、主に、榮光と讚美、世々限りなくわらん事を。

明治四十年六月上旬

著者 識

目 次

第一章	心靈的問題	一
第二章	眞之神	七
第三章	罪	一四
第四章	罪之結果	二九
第五章	救	三七
第六章	聖潔	四六
第七章	再臨	五二

# 心の鏡

霞峯子著

## 第一章 心靈的問題

楚辭の雲を籠むるやうな頭髮の、艶のある房々しいのを  
 庇へした額の富士が、長く裾を延いて生ね下りに垂れ、  
 露を含んだ眼の上に三日月の似な眉が鮮かに秀で、鼻筋  
 は通つて恰好よく、口元の締つて優しい工合……、  
 なんどと申しますれば、何でも餘程の美人かの如に聞か  
 ますけれども、それは唯だ外貌の評丈けで、「人は外の

心の鏡

貌を見、眞の神は心を見るなり、又た「美しき婦のつゝしみなきは金の環の冢の鼻にあるが如し」と聖書にある通り、外形は如何程眞面目を装うて居ましても、また美を街うて居ましても、人の心の奥底迄も見透したまふ活ける眞神様の聖前に、若し少しでも罪に汚れた分子がおりますなら、其人の心霊は誠に醜いもので御座います。世には随分他人の美しいのを見て頻りに自分の醜いのを心苦しく思ひ、少しでも美しく見せやうとして、或は糠や石鹼やリスリンや、乃至紅白粉チツク香水の類を用ゐて、朝から晩まで嬌飾して見たり、又は流行を競うて衣服を着飾りなると致ましても、自分の心霊的問題に就ては、サツパリ無頓着で居るやうな人が多う御座います。

人は外の貌を見、眞の神は心を見る也！



假令、顔容が甚麼様に奇麗で、現世の何んな人に寵愛さるゝ僥倖な身の上で、あらゆる榮耀榮華を極むる事が出来ましても、噫それは眞のチヨツトの間で、人生僅か五十年か七十年、而かも明日の事すら分らない人の身に取つては、恰ど朝に咲いて夕に萎む野の草花に似て、夢の如く消ぬ去るのではありませんか。

然れば果敢ない塵の浮き世に止まつて居る、極短い間のみ保たれるべき肉體の、その顔容の美醜等は何うでも可いとして、あゝ敬愛する讀者諸兄姉よ、いつく迄も消ぬ失せない人間の靈魂、否爾の靈魂の問題に就て、少しく考へて見やうでは御座いませんか。

互に欺き欺かれて世を渡つた終が遂に悲しむべき死に至

る、是れが此世の有様です、爾はそれで御満足なさいますか、縦し爾は満足して居らつしやいまして眞の神様の定め給うた法律により、罪を犯した靈魂は永遠限りない滅亡の刑罰に處せられねばならぬ事に決まつて居ます人間の本心は言はず語らずのうちに之を知つて居ます、而うですから「罪ある者には平安あることなし」どの聖言通り、現世に於て、何んなに名譽があつても、地位が高くつても、學識に富んでゐても、財産が豊かであつても、得たいと思ふ眞の安心が得られず、欲しいと思ふ眞の喜樂が無く、何よりも死ぬる事を厭ふので御座います。處が茲に唯一つ、大小何んな罪でも皆赦されて、靈魂が永遠の救に與かり、現世から眞の安心と、眞の喜樂との

幸福な生涯に移り、眞の神様に喜ばれ又た愛せらるゝの  
 みならず、何人の前に出ても耻づる處のない、實際に心  
 靈的高尚純潔人物と成る事の出来る、驚く可き一大秘訣  
 があるのです。是れは現世の名譽や地位や學識や財産等  
 で買ふ事の出来るやうなものでは御座いません、けれど  
 もまた、そんなに困難い事でも有りませんから、今爾と  
 共に此問題に就て、順を追うて學びたいと思ひます。

讚美歌百八十八番

- 一 わだなる華の世にすめば ねいもわかきもさだめなき  
 かせにさこはれるは散り ゐるはしばらくのこるなり
- 二 ささだちゆくもたくるも つひのすみかはうへもなき  
 あまつみくにか底もなき ほろびのふちかはかざなき

- 三 やよ浮かれゆくたましひよ 汝がわくがるゝそのはなを  
 ささひゆくへきやまかせの わすをもまたで吹かぬかは
- 四 さらば人の子ころして ところをはるにちりもせず  
 しほみるやらさきにはふ みぞの華をたづねみよ

第貳章 眞之神

先づ此の天地間の現象から稽査て行きませう、試に目を  
 擧げて大空を望みますれば、晝は眩い計りの光を放つて、  
 王者を装ふ太陽が意氣揚々と輝いて居、夜は幾千萬とも  
 知れない星が、満天に燦いて翠のどばりを彩どつて居ま

す、廣々としたる蒼穹のさま、其うちに言ひ難き壯嚴の  
 氣が充ち満ちて居るではありませんか。俯して地を瞥ま  
 すれば幾億萬の人類は、各々其自由の意思に従つて、或  
 は農業に工業に商業に、學問技藝其他百般の事に心身を  
 勞し、或は働さ或は憩み、或は泣き或は笑ひ、又は堂々  
 と若くは蠢々として生存してゐます。可愛らしい鳥は能  
 く此間を翔けめぐり、多くの獸はそこそこに餌をあさつ  
 てゐます。野山は時に従つて美しい花、心地よい青葉、  
 將たまた錦とまがふ紅葉もて奇麗に飾られ、田畑は折り  
 折りの稔豊かでありまして、凡ての生ある者に一時も欠  
 ぐ事の出来ない空氣は至る處に充ちてゐますし、雨は地  
 を潤して五穀の生長を助け、清き流をなして海にも入れ

ば、形をかへて空にも上り、春夏秋冬四季の循環は都合  
 よく、思へば思ふほど、見れば見るほど不思議に秩序整  
 然としてゐる此天地間の凡て、これは一體自然に出來た  
 ので御座いませうか、將たまた偶然に出來たので御座い  
 ませうか、茫漠なる此の宇宙は唯是れ主人のゐない空屋  
 でせうか、單に物質の集合體でせうか、抑も之を造り、  
 之を守り、之を運轉し、之を統治してゐる者はありますま  
 いか、人間の運命を支配し、其是非善惡に對つて公義な  
 る審判を施す者は絶えて無いので御座いませうか、わろ  
 敬愛する讀者諸兄姉よ、爾は此問題に就て深く意を定め  
 ておいでなさらないかも知れません、或はこんな事は閑  
 問題だから顧る必要が無いと仰しやるかも知れません、



けれども是れは、苟くも人間として爾かく等閑に附して置いて可い事では無いと思ひます、古來幾多の人が知らん事を欲つて心を盡し、煩悶遂に死を決する迄に苦しんだ程の問題です、世の所謂哲理の蘊奥を極めたといふ智者學者達にも解らない幽玄な問題です、此世の知識を以てしては何んなに解しやうとしても決して解せられない問題です、去り乍ら何んな無學文盲な者でも眞の神様の聖力に頼りますならば、苦も無く判然と氷解る問題なので御座います。

「元始に神天地を創造り給へり」  
 即ち主人の居ない空屋でもなければ、單に物質の集合體でもない此の宇宙と其中にある森羅萬象は、皆悉く、全

智全能なる眞の神様が之を創造されたので御座います。  
 世の初めに萬物の靈長として人類の始祖、アダム、エバが此造物主に造られました時は、誠に罪もなく死もなく随つて恥もなく恐もなく、エデンの園に於て此の慈愛深い造物主なる天父に恩寵されつゝ、偕に喜び樂んでゐる事の出来る幸福な身の上でありましたが、一度惡魔の誘惑に陥て、罪を犯しましてから、始めて恥と恐とを覺わエデンの園から逐ひ出されて遂に死の刑罰を科せらるゝ事に決まつて了ひ、其後裔は其罪の性質をうけついで全世界に蔓り、世は愈々姦惡の波漲つて滔々止まる處を知らない迄に墮落しました結果、漸々と其造物主なる眞神様の在す事すら忘るゝやうになつて、却つて造られた人

問や、日や月や、禽獸、昆蟲、樹石、洞穴、木片、紙片、金銀、珠玉の類、乃至驢の頭迄も信心からと云つて之を神とか佛とか名けて、伏し拜むやうに迷つて了つたので御座います。如何に紀念すべき、また尊敬すべき、大なる聖賢君子でも、將た當代の花どうたはれた英雄豪傑でも、偉人でも名士でも、人間はやはり人間なので、且つ其既に死了つてゐる者を、同じ人間が之を神として信頼する價值が御座いませうか。況してそれ以下の偶像邪神を祭り拜むに至つては誠に愚昧の極と申しまして、敢て過言ではありませぬ。

そこで私共は一切此等の迷信から脱れて、活ける眞神様の御存在を認めねばなりません。而かし此の眞神様は、

約四〇二十四

「神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也」と聖書にある通り、肉眼で見えたり、手で捫つたりする事の出来るやうな、つまらないものと違つて、全宇宙至る所に在さるなき聖義なる獨一の天父、これを人類の運命を支配され、又た凡てのものを統治して居給るので御座います。

徳七〇二十四、二十五

「それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是れ天地の主なれば手にて造れる殿に住たまはず、かつ衆人に生命と氣息と萬物を予へたまへば物に乏しき事なし、人の手にて事へらるゝものに非ず」

「それ人の見ることを得ざる神の永能と其の神性とは、造られたる物により創世より以來さとり得て明かに見

二〇二

心の鏡

るべし、是故に人々推諉べきやうなし」

- 一 われらの神こそあめつちの主なれ くにしくしまくよるこびたへよ
- 二 みいつのひかりは世界をてらせり 地はわふぎ見つゝみまへにふるへり
- 三 たれかはさからふ主のたはみわざに たれかはなみする主のたはみむねを
- 四 もろくの君主よみまへにひれふせ すへてのちからは御神にこそあれ
- 五 わめにもつちにもうたのきこゆなり われらの神こそまことの御神と

第叁章 罪

御存じの通り當今は理化學が非常に發達しましてX光線  
の作用により、人の體を通して其中の状態を明かに知る

噫

なんぢら  
禍なる哉  
偽善なる人  
よ  
爾曹は白く  
塗たる墓に  
似たり  
外は美しく  
見れども  
内は骸骨と  
諸の汚穢  
にて充つ  
心の鏡



事が出来るやうになりましたけれども、それはホンの體の一部分でありまして、且つ人の心臓を見る事は出来ないものであります、而かし乍ら眞神様の聖言は、氣と魂、また筋節骨髄まで刺し割り、心の念と志意を鑑察もので一度此の聖言なる鏡に照されますならば、人の心臓の有様が残らず赤裸で露顯るので御座います。顔や容が甚麼様に奇麗でありまして、心の裏の醜さはこれこの通り、誰にでも、貪慾、憤怒、毀謗、盜竊、傲慢、姦淫、嫉妬、争鬭、怠惰、虚偽、其他色々の罪汚穢があるのではありますまいか、之を共に考へたいと思ひますゆゑ、先づ最初に、

(一) 貪慾

「慾すでに孕みて罪をうみ罪すでに成りて死を生む」而うです、凡ての罪は多く私心私慾から生み出さるるので御座います。例へば、立派な學者になつて郷童にはこりたいたか、名譽ある地位を占めて人の榮耀をうけたいとか、暴利を貪つて財産を富みたいとか、人の上に立て幅を利かせたいとか、又は甘しい物が食べたいとか、美しい衣服が着たいとか、立派な家に住みたいとかいふやうな、畢竟現世に屬いた、自己の肉體の慾、眼目の慾、權勢の慾、名譽の慾等を恣にしたいた爲めならば、假令他人には何んな迷惑を掛けても、泣かしても、一切關はなれないふ恐ろしい貪慾な根性が、常も多く、罪といふ罪の根本となつてゐるので御座います。次は

(二) 憤怒

凡そ人を怒る者は人殺しと同じ罪を犯した者であると聖書に録して御座いますが、生れて以來未だ嘗て一度も憤怒つた経験が無いと仰せらるゝ御方が此世に幾人おられませうか、次は

(三) 毀謗

成る程相手方の面前では体裁の良い事計り申してゐますが、サテ其人の蔭に廻つては互にそしり合ひをするのが世の人の常ではありますまいか、昔しから井戸端會議で姑が嫁の事を、嫁が姑の事を、又た下婢が主婦の事を、しるといふ事などは聞き馴れてゐますが、此のいまはしい中傷的毀謗會、蔭口會は、強ち下等社會や世の裏面で

計り開かれてゐるのでは無いと思ひます。次は

(四) 盜竊

固より國法上の竊盜罪を犯した事計りを申すのではありません、或は親の物を盗み兄弟の物を盗み、又は主人の物を盗み、勤務先の物を盗み、若くば人の目を盗み、衡量尺度の目を盗み、乃至時間や月給、爵位勳功などを盗んだり、さまざまの風にして、眞神様の聖前に盜竊の罪を犯してゐる人が、此世に少ないとは思はれませぬ。次は、

(五) 傲慢

「驕傲は滅亡に先だち、誇る心は傾跌に先だつ」  
ある人は其容貌風采を自慢し、ある人は其の才智學問を

鼻にかけ、或人は貧賤しき人を見下して、己が衣食住の贅澤を誇り、ある人は表面の朴直を装ふて聊かの己が善行を吹聴し、又ある人は上官のお髭の塵を拂ふ事に妙を得てゐるといつて高ぶり、又或人は権門に媚びないからと云つて誇り、或は人の落度を責め失敗を笑ひ、又は人の罪と比較して、己れ批判者の位置に立つたり、其他己の名自慢、自慢、兄弟自慢、親自慢、家柄自慢、親類自慢、處自慢、國自慢なんぞ數へ來るならば澤山な種類の驕傲方があります、要するに六千年來の遺傳症となつてゐる、  
 「勢より起るたかぶり」の罪が何んな人にも附き纏はつてゐて、それから色々な罪が枝葉のやうに殖ゑて出て來るので御座います。次は、

約章二〇十六

(二八) 姦淫

「婦と姦淫を行ふ者は智慧なきなり、之を行ふ者は己の靈魂を亡ぼし、傷と凌辱とを受けて、其恥を雪ぐ事能はず」

嚴六〇三十二、三

國法上では、只だ夫のある婦人が他の男子と密通したのを姦淫と申す位で、妻のある男子が他の婦人と不義を行ふ事や、又は未婚の男女が汚らはしい關係を結ぶ事などに就ては一向制裁が加へてありませんが、眞神様の聖語には「凡そ婦人を見て色情を起す者は中心既に姦淫したる也」とありますからして、勿論、男子を見て色情を起す婦人も同じく中心既に姦淫の罪を犯したのであります。されば自分では一向氣附かずにもまして、老若を問は

太五〇二十八

ず、其の動機の上に恐ろしく又た悪むべき姦淫罪を犯してゐる男女は此の世の中に充ち満ちてゐるのでありませうのに、况して動機の上を通り越して、或は卑猥な言語を弄したり、汚れた舉を敢てしたり、浮き川竹の身となつたり、不潔な廓に遊んだり、又は他人の妻や他人の夫を戀ひ慕ふて、全く道義的觀念を失つた行ひに出る事などの、如何に眞神様の聖前に大なる見苦しい又た聞にくい罪であるかをお互に記憶たう御座います。次は

(七) 嫉妬

「ねたみは骨の腐れなり」  
 他人の成功を羨んだり、他人の幸福をそねんだり、凡て他人が自分よりも榮達くなるやら金儲けするやら、愛せ

らるゝやら、賞めらるゝやらする事などに感情を痛めるとか、又は夫婦の間に面白くない事の起つたりするのは主に嫉妬の罪から根ざして来るのでありますまいか。  
 「疑き者は嫉妬の爲めに己を死しむ」次は

(八) 争闘

夫婦の争ひや親子の争ひ、又は兄弟の争ひや親類間の中違ひなんかは、随分經驗のある御方もありませう、又たチヨットした口争ひが導火線となつて恐ろしい血塗れ騒ぎ等を演出するやうな事の此世に少くない事もお互が日毎に見聞してゐる處で御座います、眞の神様は「人と争ふ事勿れ」と仰せられてありますから、人々互に相争ふのは即ち眞神様の聖前にやはり罪なので御座います。

「互に分争ふ國は亡び互に分争ふ家は傾るゝなり」次は

(九) 怠惰

世には随分、夫の留守に晝寝計りして肝腎の裁縫のわざはサテおき、臺所の始末すら行き届かない無精な妻もあれば、又た妻兒のある身であり乍ら、興へられてゐる自分の職業にさへ不忠實なところから、遂に貧しくなり漸漸借金が増つて世間に不義理が累る、止むを得ずに賭博をうつ、負ける、自暴自棄で益々酒を飲み、醉狂する、妻が泣く兒が飢ふる、遂々泥棒になつて、捕まつて、おしまい監獄行きといふやうな調子で、誠に色々な罪惡を惹起す處の恐ろしい怠惰罪は、獨り斯う云ふ家庭に計り潜んでゐるのでもありません。

「惰者よ蟻にゆき其爲す處を觀て智慧を得よ、蟻は首領なく有司なく君王なけれども、夏のうちに食を備へ、收穫の時に糧を歛む、惰者よ汝何づれの時迄臥息むや何づれの時迄睡りて起さるや、暫らく臥し暫らく睡り手を又きて又た片時やすむ、さらば汝の貧窮は盜人の如く來たり、汝の缺乏は兵士の如く來るべし、次は、

(十) 虚偽

「人は皆虚偽をもて其の隣と相語り滑かなる唇と武心とをもてものいふ」

誠に人間は表面と裏心とが雪と炭とのやうに違つてゐるまして、例へば折角の御來客が有るのに、少し長居さるゝからといつて臺所には箒を逆に立て「チヨツ早く歸れば



よいのに」だなんと心の中ではつぶやいてゐる僻に其のお客の面前では、心の剣を隠して蜜のやうな言葉を弄し「マア何うぞ御ゆつくり」などとといふやうな人は少くないのではありますまいか。又た甚だしい人になりますと「彼等はいふわれら舌をもて勝を得ん此の口唇はわがものなり誰か我らに主たらんやと」全でうそ吐く事の上手なのを誇り顔に、「残害と苦難とを其道に遣し」乍ら、地上ををろく／＼をろついでゐるやうな人も多う御座います。

此の外、人間の肉體を害する酒や煙草を飲喫む「自ら戕ふ」の罪、「善を行ふ事を知りて之を行はざる」消極的罪また色々種々な罪の種類が他にも澤山にありませうが、

詩十二〇四

羅三〇十六

徒十六〇二十八

雅四〇十七

約壹一〇八

羅二〇三十一

先づ以上の内何れ一つかにでも當て嵌まつて御自分に罪ある事を御悟りなさいましたか、それともまだ心を頑迷にして自分には爾かき罪の些細なる一點だも認むる事能はずと仰せなさいますか、「もし罪なしと言はゞ是自ら欺けるにて眞理そのうちに在なし」他人を欺く事は出来ません。況してや全智全能の活ける眞の神様を何うして欺訛することが出来ませうか。縦しんば前陳の罪が一つも無いと假定しても、是迄色々の方面から鴻恩をうけてゐる天地萬物の創造主なる眞神様を信せず拜せず、又た感謝する事なくして日を送つて参りました神不孝、即ち罪のうちで最も大なる不信仰の罪、忘恩の罪は何うしませう、於是乎聖書に「天

下に義人なし一人もあつるなし」とある事の眞理であることが知られます。古來品性の最も氣高い人物と云はれた人は皆自分の罪を最も深く自覺つたもので御座います。で寧ろあなたも謙り下つて、幼兒のやうに柔和く、「成る程自分は『白く塗りたる墓』のやうだ」と心から首肯いて、之を哀みなさいますならば、天父の聖前、爾のため誠に喜ばしい事で御座います。

太二十四〇二十七

讚美歌二百五番

- (一) わゝ神よみむねに      そむきにそむきし  
この身はみまへに      いづるをうべきか
- (二) つみよりうまれて      つみにたひたらぬ  
御救あらずば      はるふるほかなし

- (三) いためる事を      をりたまはぬ主よ  
つみにほるびゆく      身をすくひたまへ
- (四) れもひ出るさへ      耻かしき罪を  
をかせるわが身は      みさばきにたへず
- (五) をのゝきたれそれて      みまへにふす身に  
のぞみのひかりを      主よてらしたまへ

### 第四章 罪之結果

其國の法律を犯したものを見過しにするやうな國王でありましたなら、遂に其威嚴は地に墜ち、其秩序は紊亂れて了ひますると同様に、人間の良心に依つて辨へ知る事

の出来る眞神様の律法を破つてゐる者を其儘にしておきますなら眞神様の正義公平な徳は顯はれません。また、例ひ何のやうに叙聖な國王で、明敏な有司をのみ用ゐてゐましても、人間の力には限りがあつて、行き届かない場合も多くありますために、往々法網を逃れたり、時効によつて刑の執行を免れたりする罪人も御座いませうが、全智全能にして全宇宙を統治めてゐる給ふ所の、聖く義しい眞の神様は一點微塵の汚れをも之を嫌ひ給ひますので老若男女の別なく、罪の大小を問はず、一人も漏さずに必らず之を審判く事に決められ、且つ其の権力は御自身に有つてゐる給ふので御座います。

來九〇二七七

「一度死ぬる事と死にて審判を受くる事とは人に定まれ

る事也

羅六〇二十三

結十八〇四

「罪の價は死なり」  
「罪を犯せる靈魂は死ぬべし」

路十二〇二十

あゝ爾は尙ほ幾年間此世に生き永らへてゐる事が出来るといふ確なる保険證を持つてゐらつしやいますか、「無智なる者よ今夜爾が靈魂とらるゝ事あるべし」、御考へ下さい、罪の報は現世で心配苦勞の中に日を送つて死に、終に肉體が葬られた計りで濟むものではありませぬ、爾の肉體を支配してゐる所の爾の靈魂、喜怒哀樂の感じを有つてゐる所の爾の靈魂が、爾の肉體から離れて眞の神様の正義公平な審判を受けねばならないのであります、而して靈魂の死ぬると申しますのは靈魂が消え失せて了ふ

といふ意味では無くて審判の結果、爾の靈魂が永遠限りなく、苦しい悲しい恐ろしい滅亡の刑罰に處せらるゝ事をいふので御座います、其刑罰が何の位恐るべき次第であるかは逆も茲に解釋を能く盡す事は出来ませんが、聖書を見ますならば判然するので御座います。無論是等の事は永遠の元始から眞神様の定め給ひました法則ですから、何んな智者や學者が明論卓説を逞ふしてみましても、此の永遠に亘つて替る事のない眞理を枉げる事は到底出来ないので御座います。

既に爾は眞神様の御存在につき、又た罪につき審判につき、永遠の刑罰につき、御自分に罪ある事を覺られて、目下の不平と煩悶と恐怖と疑惑との原因が略ぼ御わかり

になつたで御座いませう。

然らば爾は如何にして救はるべきで御座いませうか、否爾は如何にして誰によつて何によつて救はれやうと御思召ますか、寧ろアキラメて此世の心配も苦痛も、將た肉體の死も、永遠限りなく靈魂の滅亡に至る刑罰をも、受けやうと御思召すので御座いますか、あゝ諸兄弟さん、茲は二ツ浮いた心を落ち着けて、眞個に眞面目になつて御考へなさるべき事だと思ひます。

國の法律は其の人民を保護する事は出来ましても人々の心臓を改造する事は出来ませぬ、又た爾御自分の決心覺悟で爾の罪惡を禦いだり、爾の靈魂を救ふたりする事は勿論六ヶ敷のであります。況して色々な偶像邪神を拜ん

だり、乃至は名譽、財産、地位、學問などに頼つた處で何うして眞の救に入る事が出来ませうか、成る程迷信の結果往々にしてアキラメ的の安心をもつてゐる人も無ひ事はありません、又た表面の愉快を装ふてゐる人も御座いませう、けれども「靈魂の救」の確信をもつ事が出来ないので、基礎が動き易いのであります。それから縦し御自分の決心覺悟で若しも一時惡を離れて善を行ふ事が出来ると假定しましても、悲しい事には二三日若しくは一週間と續きません、のみならず是迄の罪の重荷は依然として、爾の双肩に負つてゐるので御座います。

噫然らば如何にして救はれませうか、「我れ救はれん爲めに何をなすべきや」「われ何をなせば救はるべき」との叫聲が、爾の衷心から出るやうになりましたならば、そこそ爾の爲に幸福な事です、蓋爾が何の功も不須して救はれ得る、大なる喜の音があるからで御座います。

路二〇十

福音唱歌二十一番

- 一 つみある世の人のため  
いかなる人びとにても  
エスは死にたまへば  
みなすくはるるべし
- (しをりかへ)  
エスの……すくひ……  
つみある人のため  
エスの救ひうけよ
- 二 つみある人とはたれぞ  
れぞろしき神のさばき  
これはわたたのこと  
今にむくひきたらん
- 三 水のれをつくりし神を  
つみををかす人びとよ  
たそれわがめずして  
死にて亡びにゆかん

それ  
 十字架の  
 教は沈淪  
 者には恐  
 なるもの  
 我儕救は  
 るる者に  
 は神の能  
 たるなり



第五章 救

提前一〇十五

羅三〇二十六三

「キリストイエスを罪人を救はん爲に世に臨れり信すべく  
 また疑はずして納べき言なり」  
 「蓋人皆既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず  
 只キリストイエスの贖に頼て神の恩をうけ功なくて義  
 とせらるる也、神はその血によりてイエスを立て信す  
 る者の挽回の祭物とし給へりそは神忍て已往の罪を寛  
 容にし給ひしことに就て今其義を彰さん爲め即ちイエ  
 スを信する者を義とし尙自ら義たらんが爲なり」  
 人は皆既に罪を犯してゐますれば、聖く義しい眞神様か  
 ら少しも恩を受る價値の無いものとなつて了つてゐます

第五章 救

三七

けれども眞神様は慈悲と憐憫とに富んでる給ひますから私共罪を犯した人間の一人だにも滅亡る事を喜び給はな  
いで、其測る可からざる宏大無邊の愛を御獨子イエスキ  
リスト様に據て現し給ひました。即ち

「神は其の生み給へる獨子を賜はゞに世の人を愛し給へ  
り此は凡て彼を信する者に亡ることを無して永生を受し  
めんが爲なり」それ故に、

「キリストは神の體にて居しかども自ら其神と匹く在ど  
ころの事を棄難きことゝ意はず、己を虚うし僕の貌を  
とりて人の如くなれり」

今を去る事一千九百有餘年前、亞細亞大陸の西部、地中  
海の東岸なる、パレステナの開村ベツレヘムの地に於て

約三〇十六

腓二〇五、六

太八〇二十

聖靈により處女マリアの胎を借りて此世に産れ給ひし  
イエス様は、人と成り柔和謙遜にして、凡て人のふむべき  
道をふみ、守るべき律法に背かず、齡三十に満ち給ひま  
した時、天父よりの使命を完全ふせらるゝ爲めに、其偉  
業に着手され、處々方々を歴廻つて、時には「狐は穴わ  
り天空の鳥は巢あり然れど人の子は枕する處なし」と仰  
せらるゝ迄に、人としての艱難辛苦を具さに經驗せられ  
つゝ、人々に眞神様の御慈愛を説いて悔改を命じ、且つ  
御自身が神の子であつて、世の人を救ふ爲めに天父より  
遣はされし所以を告げ而して「我を信せよ」「我を信する  
者は死るとも生べし」「我を信する者は永生あり」とて自  
分を信仰するならば靈魂が救はれて、永遠限りなき生命

約十四〇一  
約十一〇二十五

約六〇四十七

を受る事を教へ、又た實際に色々の奇蹟を行はれて、眞神様の超自然の権能と其の大なる榮光とを顯はし、常に敬虔なる柔順を以て天父に事へ、凡ての榮光を天父に歸して人に模範を遺し高尚純潔にして深遠優美なる其徳と品性とは識はんとしても自ら現れ、實に人々をして畏服感動せしむる計りで御座いました。あゝ其イエス様は終に三十三の御歳彼のカルバリ山上の十字架に釘られ、而かも私共罪人の爲めに天父に禱告して「父よ彼等を赦し給へ彼等その爲す所を知らざるが故也」と祈られ、私共の上に荷つてゐる凡ての誼を御一身に引き受けて、貴き肉をさき血を流し以て贖罪の道を立て、拯救の門を開き給ふたので御座います。紀元前七百十二年頃の以賽亞

の預言のうちに、

賽五十三〇五  
 彼前二〇二十四  
 「キリストは我儕の愆の爲に傷けられ我儕の不義の爲に碎かれ自ら懲罰を受けて我儕に平安を與ふ其打れし痕によりて我儕は癒されたり」とあるのが現實に成就したのです。

哥後五〇二十一  
 「キリスト木の上（十字架）に懸りて我儕の罪を自ら己が身に任給へり是われらをして罪に死て義に生しめん爲なり彼の鞭打れしに因て我儕醫されたり」  
 「神罪を識らざるもの（キリスト）を我儕の代に罪人となせり是われらをして彼に在て神の義となることを得しめん爲也」

斯くて一旦死にて墓に葬られ給ひしイエス様は、眞神様



提前四〇十一

徒四〇十二

の權能によつて三日目に甦り、四十日の間此の世に在し其弟子達や多くの人々に現れ、確據なる証を以て御自身の甦りの姿を判然と示し、終に衆人の見てゐる處で橄欖と名づくる山の頂から、いとたかき榮光の天に昇られ、現に天父なる眞神様の右に活存して、絶えず禱告してゐ給ふ所の眞の全き「萬民の救主殊に信する者の救主」となられましたので御座います。

「此はか別に救ある事なし蓋天下の人の中に我儕の依頼て救るべき他の名を賜ざれば也」  
 此の如き唯一の救の道、驚く可き恵の信、大なる喜の音を等閑に聞き流して、尙ほ且つ心に嘲り笑ひ、あくまでも眞神様の憐憫を蔑視にして、好んで滅亡の道を辿りつ

哥前一〇十八

來十三〇八

太十一〇二十八

哥一〇十五

ゝある人に、愚かに聞ゆる此の十字架の教は、信じて救はるゝ者丈け、實際に眞神様の聖能と其愛とを味ふ事が出来るので、且つ耶穌といふ名が救主といふ意味である事も會得されるので御座います。故に昨日も今日も永遠變り給はざる主イエス様は、今爾を救はんが爲め、  
 「凡て勞れたる者また重を負るもの我に來れ我爾を息ません」

「爾悔改めて福音を信せよ」と、聖靈に由て爾の心の耳に囁いてゐ給ひます。が爾は此の聲を斥けて尙ほも滅亡の道に進み度いのですか、罪惡の生涯を繰り返したいのですか。

否々、爾の良心は最早や此の聲に従はん事を願つてゐま

來三〇七、八

「是故に聖靈の云へる如くせよ爾もし今日其聲を聴かば爾心を剛愎にする勿れ」

哥後六〇二

「今は恵の時なり、今は救の日なり」

オー而うです、爾の良心は確に眞理を愛しますから、屹度此の救に與からん事を願つてゐます、で此上の思案や深い研究は後廻にして、今どうぞ眞神様の聖前に、謙遜な、柔順な、碎けたる心、感情的でない赤心を以て從來の不義罪惡を悔改め、イエスキリスト様を我救主と御信じなさい、信じて御頼り申すと、口に認はして御祈禱なさい、さらば眞神様は聖靈によつて爾に對ひ、

太九〇二

「子よ心安かれ爾の罪赦されたり」

路七〇五十

「爾の信爾を救へり安然にして往け」

と告げ給ひます。是に於て爾は、爾が犯した罪は皆赦されて、全く生れ更つた人となり、常に眞神様と交つて、心に平和と安慰とを興へられ、言ひ難くして且つ榮ある喜悅に充されて、萬物の魂長らしく聖く義しい生涯を送り、感謝と讚美とを以て眞神様を敬ひ、主イエス様の愛を以て人に接し、何時死でも大丈夫靈魂が永遠の救に與かる事の出来る、幸福なものとおなりなされるので御座います。ハレルヤ

(一) 十字架の血に  
來よとの御座を  
きよめぬれば  
われはきけり

(返折) 主よわれは いまぞゆく  
十字架の血にて きよめたまへ

(二) よわきわれも みちからを得

この身のけがれを みなぬぐはれん

(三) まことをもて せちにいのる

こころにみつるは 主のみめぐみ

(四) はむべきかな わが主のあい

あゝはむべきかな わが主のあい

### 第六章 聖潔

凡そ基督信徒の生涯は幸福な生涯です、聖い生涯です、

けれども未だ犯した罪だけを赦されて、新生を實驗した迄では純粹の聖い徒とは申されません、又た眞個の幸福な生涯とも申されません、何となれば人は犯した罪の外に生れつきの罪、即ち祖先からの遺傳に依て、罪を犯し易い性質を有つてゐますので、之を根本から取り去られ聖潔められてゐませんならば、屢々不潔な念に驅られたり、再び罪を犯したりする爲に、或は他人を蹟かせ、又たは自ら煩悶し、若くば遂に信仰の道から墮落て、前よりも甚だしい憐れな状態に陥る事がないとも限られないからであります。

私共はいくら己の熱心や、己の元氣や、己の才力で奮發つて、世の罪惡と戦はうとしましても、先づ此世に屬い

た肉の情と慾とを有つてゐる「古き人」を十字架に釘られ、「己」に死に、所謂罪の性質を根本的に聖潔められて眞神様の聖靈を受けてゐませんならば、到底罪惡に打ち勝ち、信者として聖い行みを成全する事は出来ません。聖書に「神の旨は爾曹の聖き事」と示してありまして、「我潔ければ爾曹も潔くあるべし」と眞神様が命じてゐ給ひますからには、どうして私どもの聖潔められ得ざる道理が御座いませうか。

「況て永遠靈により瑕なくして己を神に獻しキリストの血は爾曹に活神を奉事せんがため死の行を去しめて其心を潔ること爲ざらん乎」  
主イエス様が彼の十字架の上、あらゆる凌辱を受けて

來九〇十四

彼前一〇十六

撒前四〇三

流し給ひし血潮の功は、爾の靈魂を救ふ能力と、爾の病患を癒す能力と、爾の肉體を甦らす能力とを備へてゐるのみならず、爾を聖潔むる能力があつて、優に餘りあるので御座います。

約壹一〇七  
徒二〇四  
加五〇二十二  
哥後三〇十七

オー愛する爾！ 今誠心から求めて、「イエスキリストの血すべて罪より我を潔む」との實驗に入り、斯くして御遠慮なく「聖靈に満されたり」との信仰を興へられなさい。然らば聖靈は爾の裏に在て、仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節、等の果を結び、且つ永遠の完全なる救に爾を導き給ふので御座います。聖書に「主の靈ある所には自由あり」とありますが、まことにその聖言の如く、律法の轡から

聖靈の結ぶ果



免れ聖靈の與ふる眞の自由を以て、惡魔との戦に勝利を得、自らを守りて主の愛の中に居り常に喜び、絶えず祈り、總ての事感謝しつつ、眞神様の榮光を顯はす生涯こそ、眞個の幸福な生涯と申さねばなりません。

(一) エスよこころにやせりて

われをみやとなしたまへ

けがれにこみしこのみを

ゆきよりむしろくせよな

わがつみをあらひて

ゆきよりむしろくせよな

(返折)

(二) エスよみちからによりて

すべてのわだをたひやり

われをまたきにへとなし

みまへにささげしめてよ

(三) エスよ十字架のもとに

われはふしてこひねがふ

ながれいづちるしはにて

つみの身をきよめたまへ

(四) エスヤキアの5章に於て

キヨメらるゝ事なれし事

ことをあらたにつくり

キムのものとなしたまへ

### 第七章 再臨

御自身の血によつて聖潔め給ふた聖徒等を迎へ、之を千  
 年王國の榮に與からせて、尙ほ新天新地の福に入らしめ  
 んが爲め、且つ、正義公平を以て萬國の萬民を審判せん  
 が爲めに、再び臨り給ふ主イエス様は、其御在世中に、  
 「わが父の家には第宅おはし然らずば我豫て爾曹に之を  
 告べきなり我爾曹の爲に所を備に往く、もし往きて我爾  
 曹の爲に所を備ば再臨りて爾曹を我に納べし我居る所に

約十四〇二、三

徒一〇十一

爾曹をも居らしめんとて也」とみづから宣給ひ。天使は  
 主の昇天の際人々に對つて、「曰けるは、ガリラヤ人よ何  
 故に天を仰て立るや、爾曹を離て天に擧られし此イエス  
 は爾曹が彼の天に昇るを見たる其の如く再臨らん」と主  
 の再臨を証明しました。使徒も亦聖靈によつて屢々主の  
 再臨に就て明言しましたが、その中にも、

撒前四〇十六十七

「それ主號令と使長の聲と神の箴を以て自ら天より降ら  
 ん其時キリストに在て死し者先に甦へり、後に活て存る  
 我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇べし斯  
 て我儕いつまでも主と偕に居らん」と御座います。

もとより主の再臨は、之を俟ち望んでゐる聖徒等に取つ  
 ては無上の光榮、最高の幸福であります、これに反し

賽三十三〇十七

提前六〇十五

撒後一〇十

太二十五〇十三

羅十三〇十二

て不信者や聖潔められてゐない信者に取つては、大なる恐ろしい禍な事で、それは世人の擯斥輕蔑をうけられた主の初臨の時と違ひ「福ある所の獨一の權威ある者、諸の王の王、諸の主の主」として現出れ、榮光の位に座して聖徒に由て讃をうけ萬國の民を殘らず審判さ給ふからで御座います。

其再臨の時日に就ては誰も得て知る事は出来ませんが、「夜すでに央て日近けり」あゝ六千年の夜は既に央て、早や明けなんとする當今、晝に屬ける我儕はよろしく寐より寤め、暗昧の行を去て光明の甲を衣、信と愛との護胸をわて、完全なる救の望を胃として慎み、かくて些少の「點汚なく緘なく凡て此の如き類なく聖にして瑕な

き榮なる教會」即ち羔の婚姻に與かるべき新嫁の一員として携へ擧げらるゝ事の出来るやうに、常に血潮の功によつて主の再臨を迎ふる備をなし、大膽に、而かも謙り下つて、且つ喜んで俟ち望んでゐる事が、お互に肝要な事と思ひます。

「此默示はなは定まれる時を俟て其終を急ぐなり、偽りならず若し遅くあらば待べし、必らず臨むべし、濡滯りはせじ」

オー冀くば窮りなき契約の血によつて羊の大牧者なる我儕の主イエスキリストを死より甦らし、平安の神、御自ら讀者諸兄弟姉を悉く救ひ、且つ之を全く聖潔くし、その全靈全生全身を守りて、我儕の主イエスキリストの再臨

哈二〇三

らん時に咎なからしめ給へ、榮光神に歸して世々懺なからん事を、アーメン。

(一) いつ主はきたりたまふや

たれもしらねば

われらはたゆまずめさめ

まもるべきにぞ

身もたまもれもひをも

みなきよめられ

(返折)

主をまことのぞむものは

いとうるはしきかな

(二) もしこのまゝにわれら

主にめされなば

たそれもなくみまへに

たつをうべきか

(三) きよめられしたみらと

こゝろをわはせ

よきわざをはげみつゝ

主をまことのぞまん

(四) われすみやかにいたらん

ハレルヤアーメン

主イエスよきたりたまへ

ハレルヤアーメン

心の鏡終

明治四十年六月七日印刷  
明治四十年六月十二日發行

(定價金七錢)

著者 空閑知鷺治  
大阪市南區下寺町傳道館内

發行者 青木由太郎  
大阪市南區難波元町五丁目  
五百四十一番地ノ五難波傳道館内

印刷者 田中辰之助  
大阪市東區高麗橋貳丁目六十七番屋敷  
合資會社大阪龍雲會代表社員

印刷所 合資會社 大阪龍雲會  
大阪市東區高麗橋貳丁目六十七番屋敷

發行所 大日本基督教幻燈傳道會  
大阪市南區難波傳道館内



大日本基督教幻燈傳道會

# 發行書目

- |         |       |
|---------|-------|
| 讚美唱歌    | 定價 二錢 |
| 信仰の少女   | 定價 二錢 |
| 渡邊龜吉悔快談 | 近 刊   |
| 封永生の歌   | 全     |
| 放蕩息子    | 全     |

古 白

おはなすは、われわれを救へてくださった主の御恩を、今も心に刻み、一生を通じて、神の御恩を感謝し、御業を賞讃し、御栄光を賛美する。これが御恩を記念する唯一の道である。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。

御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。

御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。

御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。御恩を記念するとは、御恩を心に刻み、御業を賞讃し、御栄光を賛美することである。

大日本基督教幻燈傳道會

## 發行書目

讚美唱歌

定價二錢

信仰の少女

定價二錢

渡邊龜吉悔快談

近刊

封永生の歌

全

放蕩息子

全

## 告白

あゝ敵たりとわれら罪人たりとわれら弱きわれらをその苦みとな  
やみのうちより救ひ出さんとて神のれん獨子わが主イエスは一た  
びカルバリー山上に肉をさき血を流したまひ甦りて天に昇り今威  
光ある權威の右に坐したまひて絶えずわれらのために懇求したま  
ふ思ひてここに至るもの誰か其御恵みの深きに感涙の禁ト難きを  
覺はざらんや

主は衆人の牧ふものなき羊のてどくなやみまた流離になれるを見  
て深くあはれみたまひ夜晝涙を以て天國の福音をのべつたへたま  
ひきその十字架にかゝりたまひてはほろぶる世の衆人を見たまひ

て「我喝く」と叫びたまへり。甦りては亦彼の弟子にむかひて「偏く世界を廻りて凡の人に福音を宣傳へよ」と告げたまへり。昨日も今日も永遠變りたまはざる主は今なほはれはくの人をあはれみこれがために喝きてわれらに福音をのべつたふべきことを求めたまふにあらずや。しかはあれど余は元よりあはれなる無知なるもの到底其材にあらずしかも主は余にこの大なる使命を與へたまへり。余は唯彼に頼りてこの事をなさんと祈禱のうちに彼を俟望みるたりき。

主は屢々余をして巡査派出所に於て犯人の取調を受くるに際し常に多人數の集合して其事件を聞かんとし或はその犯人を見んとし

て雑沓を極むるを見しめ余に告げたまはまく「汝心して人の群衆するを觀しや彼らは耳あたらしき事をきき目新らしき事を見んがために集れるを知りしや奇しきを見變りたるをきかんとするは人の情也ゆけ汝幻燈を以て目と耳とにうつたへて多くの人に福音をつたへよこれ福音傳播の最良法なり」と余の心は燃々上れりされど余は元より赤貧の身なり主に祈りて曰く「われ貧しくして幻燈機械を求むるの資なしされど主よ汝命たまへり願くば汝の富にたがひてわれに機械を與へたまへ」と爾來これがためにつゞいて祈ると同時になまじうべきだけは力を盡してこれをなせよとの御言に從ひ先づ紙屑を集めてこれを賣り或は日曜學校兒童の衷心より

する一二錢づゝの寄附金をうけつゝるたりしが一日大阪下寺町傳道館河邊牧師の知る所となり直ちに金若干の寄贈をうけ次で米國宣教師タウソン氏の同情により當時余が製造するたりと押繪カードを本國に送り右の事情を新聞紙上に登載せられしに主これを祝したまひしかば金五拾餘圓を彼地より送り來れり（余はその何人より送り來りしかを知らざるなり）祈禱はたしかに答へられたり余の喜悅は如何なりしを直ちに幻燈機械を購入しこれによりて傳道と始めたりこれ明治三十三年前後の事なりきかくて主に導かれて大阪府下奈良縣及兵庫縣下の各地に幻燈傳道をなせしに主は至る所にこれを祝福したまひ、多くの信者、求道者

者を起こしたまへり次で川口居住のポーランド女教師の依頼により大阪府下各所の紡績工場に幻燈傳道をなすこととなれり會々明治三十六年七月十四、十五日の兩夜難波河原町二丁目、世軍大阪第二小隊長伊藤兄の宅に幻燈會を開きしに此所に於ても亦一人の眞率なる求道者を得たりこれ現今難波稻荷町一丁目金物業を營み居れる廣瀬廣治氏にして氏は當時深く自己の罪を悔い神を畏れ敬ひて清き生涯を送らんと志し赤貧洗ふが如くなりしも唯正義と忍耐を旨とし銳意家事に勉勵せしかば主のめぐみいちづるしく加はりて悔改後僅々三ヶ年にして壹萬餘圓の負債を償却し目下主にありてますます家業を勵み居れり氏はいたく幻燈傳道の有益なる

を感かんト今こん回くわい罪つみより救すくひ出いだされレと紀き念ねんとして瓦が斯す使し用よう長ちやう距きよ離り大だい幻げん燈とう  
機き械がい壹いつ組ぐみと金きん壹いつ千せん圓まんとを本ほん會くわいに寄よ附つけせり

此こゝに於おて本ほん會くわいは一いつ層そう傳でん道だうの範はん圍ゐを擴かく張ちやうと以もつて日に本ほん内ちやう地ちよ各かく所しよに福ふく音いん  
の門もん戸こを開かい放ほうせんと欲ほつす神かみは己おのれの富とみにしたがひキリキストイエスに  
より榮けい光くわうを以もつて本ほん會くわいの必ひつ要ようをみたしたまはんされば何なんれの府ふ縣けんを  
問とはず福ふく音いんの宣せん傳でんを望のぞみ幻げん燈だう傳でん道だう會くわいの開かい會くわいを求もとめらるゝ時ときは御おん申まう  
込こにしたがひ出しゅつ張ちやうすべく其その旅りよ費ひ器き械がい運うん送そう費ひ用ようは一いつ切さい本ほん會くわいより支し辨べん  
すべし乞こふ續ぞく々々御おん申まう込こあらんことを

オ、愛あい兄けい姉し諸しよ君くんかくて主しゆの喝かきを幾いく分ぶんにても醫いすを得えばわれらの  
幸ちやう福ふくは如い何かに大おほなるべき  
謹きん言げん

明治四十年六月

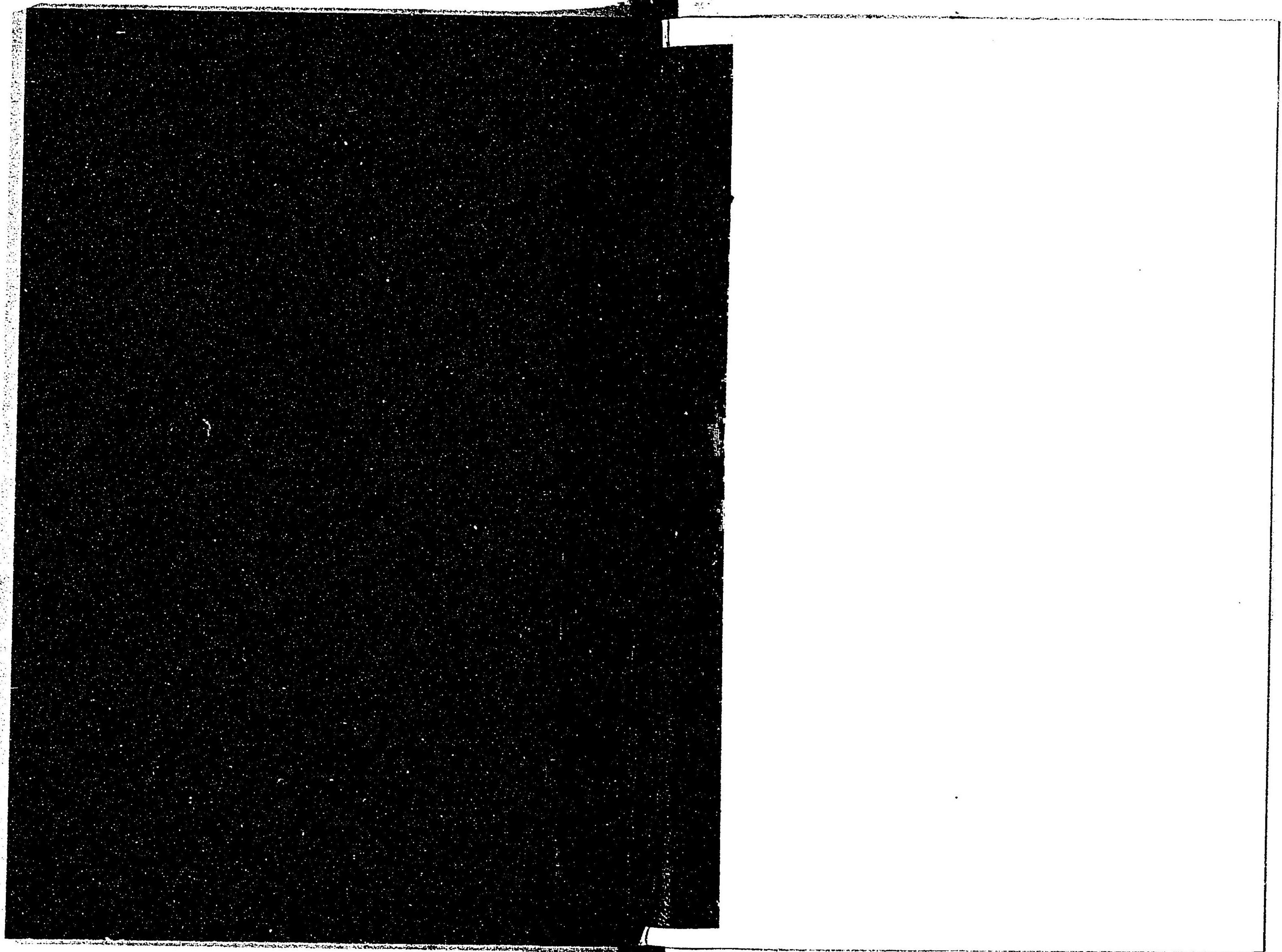
大日本基督教幻燈傳道會

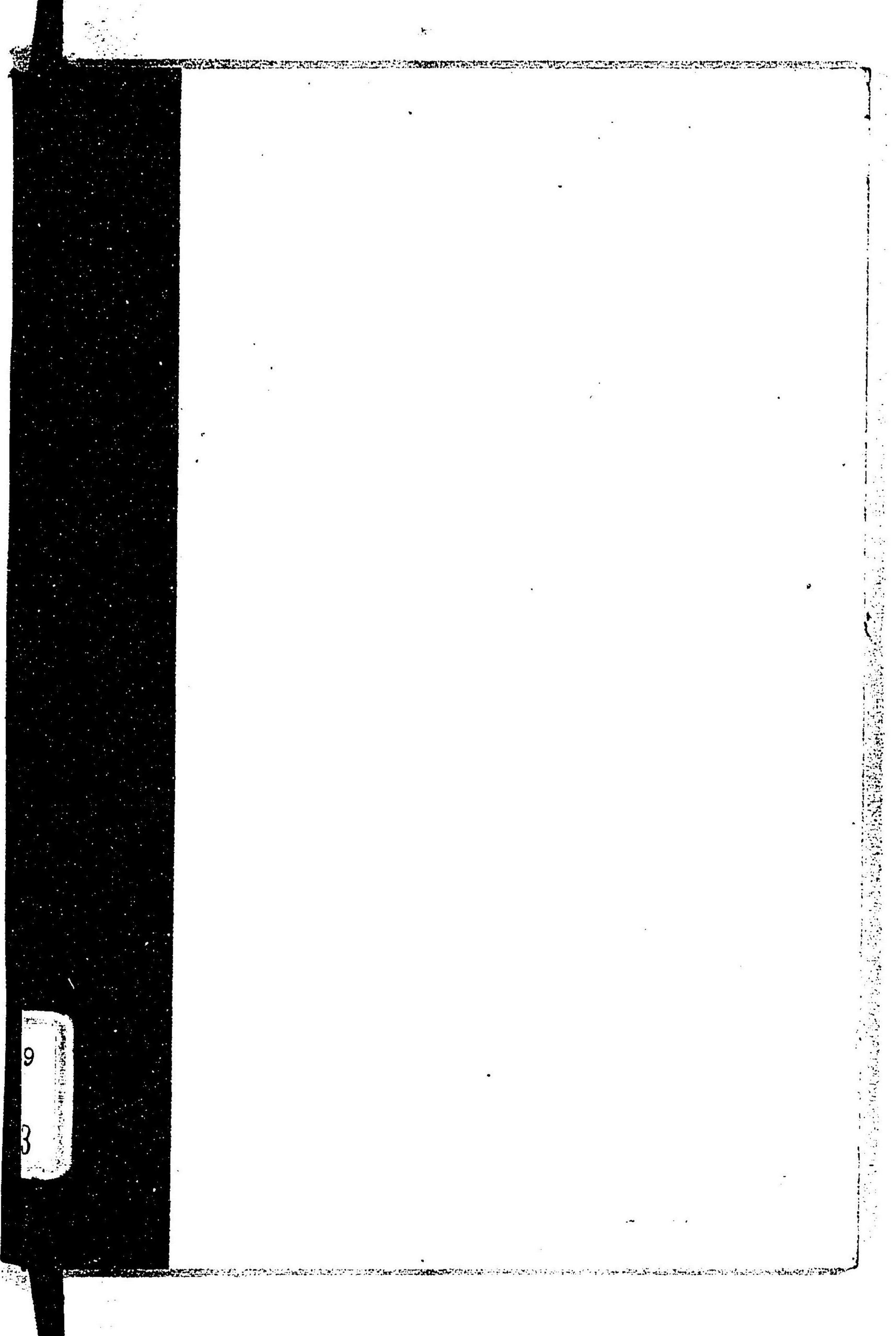
主幹 青木直太郎

A-33

なんぢ夜の初更に起きいでよ  
呼びさけべ、主のおん前に汝  
の心を水の如くそそげ、ちま  
たのはどりに、饑たふるゝ汝  
の幼児の生命のために、主に  
むかひて、両手をあげよ。

エレミヤ哀歌の一節





3  
9



心の鏡

雯峯子

国立国会図書館

020639-000-7

特49-13

心の鏡

空閑知鷺治（雯峯子）／著

M40

ABI-0455



